

# 資源生産部のこれまでと今後について

前資源生産部長 吉村 拓

## はじめに

令和2年度の組織再編により、当部も大きく変わることになりました。ここでは、過去20年近くにおける部の大まかな経緯を振り返るとともに、今後の新体制下での展望を述べたいと思います。

## 国分町から多以良町へ

長崎市街に近い国分町に西水研が置かれていた時代の終盤である平成13年に、全国9つの水産研究所が水産総合研究センターとして独立行政法人化されました。当時、当部の名称は海区水産業研究部で、有明海・八代海漁場環境研究センター、資源培養研究室、沿岸資源研究室で構成されていました。当時の様子については西水研50年史や西水研ニュースに委ねることとし、ここでは同市北部の多以良町に移転した平成15年以降のうち、別稿で述べられている有明海・八代海漁場環境研究センターを除いた研究活動を振り返ります。

多以良町への移転後しばらくの間、当部が関わった大きな研究課題は次の通りでした。

- ・養殖ノリの色落ちなどの問題
- ・磯焼けとそれに伴う磯根資源の状態悪化
- ・マダイやヒラメの資源および放流効果の評価
- ・ブリ種苗生産技術の高度化と有用家系作出

この他にも、有明海でのタイラギの生残問題や当時世間を賑わせた環境ホルモンの影響評価などにも取り組みました。

平成23年の組織改編では、有明海・八代海センターが独立した部署となり、当部は資源生産部に改称されました。本部直属であった五島栽培漁業センターが魚介類生産グループとして加わり、藻類・沿岸資源管理グループとの2グループ体制となった結果、部員の勤務地が長崎庁舎と五島庁舎の2箇所に分かれることとなりました。この改編から今日までは、以下の課題が主要なものでした。

- 1) 沿岸漁業の持続に向けた課題
  - ・マダイやヒラメなど沿岸魚の資源評価と管理
  - ・温暖化の藻場や磯根資源への影響評価、および対策法の開発
- 2) 養殖業の持続的発展に向けた課題
  - ・高水温耐性を含む高品質・高付加価値なノリ種苗の作出、そのための株の収集と特性評価
  - ・ブリの通年採卵および種苗生産技術の開発と優良形質家系の育種技術の開発

- ・仔稚魚用の人工餌料開発

これらの成果は、各種マニュアルやガイドラインとして公表・活用 (<http://snf.fra.affrc.go.jp/print/index.html> など) されている他、ブリの受精卵と種苗は有償配布という社会実装に至っています。また、当部が事務局を務めた全国ノリ研究会とハタ類資源解析研究会では、西海ブロックを大きく越えた府県との連携が実現しました。

2か所に分かれている当部では、両グループの研究課題に接点の無いことが当初からの課題でした。しかし、飼育施設を活用した植食魚の摂餌生態解明に関する実験が若手部員の連携で始まり、また近年取り組んでいる五島市離島漁業振興策(写真1.)では、磯焼け対策と海藻養殖試験における連携が実現し、ようやく部らしい体制を示すことができました。



写真1. 海底に置いたヒジキを食い食う植食魚ノトイズミ(上、せいかい25号より転載)と、養殖試験に成功したヒジキを得意げに示す部員(下)

## 今後の展望

今年度の組織再編に伴い、これら2つのグループはそれぞれ異なる部署に組み込まれる見込みです。また、両グループ長など一部の部員はそれらと異なる部署へ配置替えとなり、当部は大きく様変わりします。

名称は変わるでしょうが、藻類・沿岸資源管理グルー

ブでは、今年度から始まるブルーカーボン評価委託プロジェクトへの参画を通じて、温暖化適応策の構築や緩和技術の開発への貢献が期待されます。ノリ養殖関連では、高水温適応品種の作出が、関係県との連携強化で実現に近づくでしょう。魚介類生産グループでは、ブリの受精卵と種苗の有償配布および育種が中心になりますが、増加傾向にある配布要望に応えつつも、速やかな技術移転を実現して貰いたいと思います。加えて、地元五島市の要望が高い海藻の種苗生産も早期に実現させてくれることでしょう。魚類養殖で避けられない環境への負荷の軽減策に繋がる海藻養殖にも関わることで、バランスの取れた研究・技術開発になるでしょう。

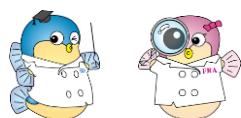
当部は何事にも前向き、かつ温厚な人物に恵まれ、部長としての4年間、随分と楽をさせて貰いました。生き物好きの部員が多く、所の一般公開で楽しそうに解説する姿は何度見ても微笑ましいものでした(写真2.)。この「生き物が好きだ」という自身の原点を忘れず、前向きな姿勢を更に貫くことで、より高度な研究・技術開発を実現してくれるものと期待しています。



写真2. 西水研一般公開で賑わうタッチプール

参考資料

- 西海区水産研究所 50 年史
- 西海水研ニュース No.107、108
- せいかい 25 号



## ばい しま 南ぬ島から - 亜熱帯研究センターの紹介 -

亜熱帯研究センター長 中川 雅弘

### はじめに

亜熱帯研究センターは、亜熱帯・熱帯特有の水産資源の適切な資源管理に資する様々な試験研究に加えて、水産有用生物の成育場として重要なサンゴ礁や藻場等の維持・形成機構の解明、さらには亜熱帯海域に生息する付加価値の高い水産資源、特に魚類を中心とした増養殖に関する研究を進めてきました。庁舎は沖縄県石垣島にあり、現在は、八重山諸島海域に分布する重要な水産資源を適切に維持管理するため、低次から高次に到る生物群集の生態特性解明や生息環境の保全・修復等の研究に取り組んでいる「沿岸資源生態グループ」と、スジアラ、ニホンウナギ、ノコギリガザミ類等の重要水産資源の親養成、種苗生産及び養殖手法に関する研究に取り組んでいる「生産技術グループ」で構成されています。

### 亜熱帯研究センターの沿革

亜熱帯研究センターは当初、日本栽培漁業協会八重

山事業場(1985年開設)と、水産庁西海区水産研究所石垣支所(1994年開所)という別々の研究機関でしたが、2003年に水産研究所が日本栽培漁業協会の業務を継承し、八重山栽培漁業センターも、2006年に石垣支所に一元化されて名称が八重山栽培技術開発センターになりました。その後、2011年の水産研究所全体の組織改編によって、石垣庁舎(旧石垣支所)と八重山庁舎(旧八重山栽培技術開発漁業センター)を組織する亜熱帯研究センターとなり、2016年には石垣庁舎の閉庁に伴い、石垣庁舎の研究業務を八重山庁舎に集約しました。

### 亜熱帯研究センターの施設・設備

敷地面積は 57,563m<sup>2</sup>で、管理棟や実験棟、棧橋(75m×9m)があり、コンクリート水槽は 15~20t が 15 面、50~110t が 24 面、200~250t が 8 面、他には小型船舶 4 隻、公用車 4 台をそれぞれ保有しています。なお、ろ過海水の供給能力は 300t/時間です(写真1)。